



—中嶋 嶺雄—

今朝は私もよく買物に行くスーパーマーケット「ラルフス(Ralphs)」の別のチェーン店の脇で一人が撃ち殺されたといつて、犯人が現場に残した拳銃がTVに映っていた。

アメリカでは、ポスニア・ヘルツェゴヴィナの憎悪と怨恨に充ちた民族間の殺戮合戦の様子が毎日報じられている。ところがそのアメリカ社会には、クリントン政権になっても経済が一向に改善されないためか、このころ犯罪が急増している。私が住むサンディエゴは、アメリカでも最も治安の良い都市だといわれているが、今日も大学院の研究室に出してみると、コンピュータを盗む犯罪が相次いでいるので、研究室と廊下の双方の鍵を絶対に掛け忘れないようにとの通達が入っていた。

一連の犯罪のなかで最近目立つのは、銃による殺人である。昨夜もカリフォルニア中部のフレズノのクラブで七人が撃ち殺された、とCNNのヘッドライン・ニュースが伝えていたばかりなの

に、今朝は私もよく買物に行くスーパーマーケット「ラルフス(Ralphs)」の別のチェーン店の脇で一人が撃ち殺されたといつて、犯人が現場に残した拳銃がTVに映っていた。

同情が現地では高まっているという。裁判での法律上の争点は、被告の射殺行為が刑法違反かどうかであるが、レイシアン州の市民たちは、自分の家庭の安全が脅かされると思つた場合、それを銃で守るのは当然だという感情論に大きく傾いて来ているという。ということになると、父親の服部氏が剛丈君の悲しい死を無駄にしてほしくないという痛烈な心情において呼び掛けた、アメリカ社会から



拳銃社会のディレンマ

一緒に、サンディエゴの東方約七〇マイルのナシヨナル・フォレスト(国定森林)の一角へピクニックに行つた。カリフォルニアの自然は大雑把に過ぎると日頃私が言っていたのでお誘ひしたのととで、地図にも出ていないという森と野原と山のその地は、信州の山野のように疎や野いちごが出ていたり、清流があったりして、とても素晴らしい。野生の砥草を見つけたので、昔はこの葦

を上げて板に張り、桐の下駄を磨くの使つたことなどを日本の若者に教えてあげたりして、私にも楽しいひとときであった。ところが帰りに山に向かつて自由に射する平原があり、日本では絶対に体験できないことだから、きつと良い思い出になるでしょう、と言つのである。若者たちは即座に同意して喜んでしたが、私はどういそんな気分になれない。相手はまったくの好意で私たちを案内したいと思つているのだから、たとえ遊びであっても実弾入りの銃を撃つという行為への私の強い拒絶反応はないは不快感を表明すれば、座が白けてしまふばかりか相手に失礼になる。何か理由をもうけて一行ここで別れて自分だけ帰ればよいのだが、自分の車は大学へ置いてカー・プール(三、四人ずつの相乗り)で来ているので、そんなわけにもゆかない。やむを得ず一緒に行って少

さな場所から立ち去りたかった。その夫婦は以前テキサス州に住んでいて、親しい友人が引越すとき、最も良い品物をといて拳銃を二丁プレゼントしてくれたのだという。それ以来、拳銃がやみつきになったといつて、その日も数丁の拳銃を車に積んでいた。カリフォルニアでは登録が必要で、実弾をつめた

ままの状態を持ち運ぶことも禁止されているけれど、テキサスでは銃の売買や所持に何らの規制もないという。ここまで書いてきて今TVをつけてみたら、ちょうどそのテキサス州で州政府が導入しようとしている銃の登録制に反対する論議が沸いている場面を映し出しているではないか。全米五〇州のうち登録制になっているのは二十一州だと解説されていたが、父親が銃の犠牲になったという一人の主婦が紹介されて、彼女が「私はホーム・オーナーとして絶対に我が家を銃で守るわ」と断言すると、周囲の人たちから強い支持の拍手が起こっていた。

銃を追放しようという運動が多くの人々の共感と呼んで広がりつつあるという報道と大きく矛盾する。そして残念ながら、そのような共感には、今日のアメリカ社会では、まさに大海の一粟にしか過ぎないように思われる。第一、この事件もアメリカでは十分に報じられなかつたようであり、私の周辺のアメリカ人のほとんどが、この不幸な出来事について知っていない。

先週の日曜日、私は大学で日本語の指導をしている日系婦人のお誘いで、日本の企業や官庁から派遣されて来ている大学院生たちと

を上げて板に張り、桐の下駄を磨くの使つたことなどを日本の若者に教えてあげたりして、私にも楽しいひとときであった。ところが帰りに山に向かつて自由に射する平原があり、日本では絶対に体験できないことだから、きつと良い思い出になるでしょう、と言つのである。若者たちは即座に同意して喜んでしたが、私はどういそんな気分になれない。相手はまったくの好意で私たちを案内したいと思つているのだから、たとえ遊びであっても実弾入りの銃を撃つという行為への私の強い拒絶反応はないは不快感を表明すれば、座が白けてしまふばかりか相手に失礼になる。何か理由をもうけて一行ここで別れて自分だけ帰ればよいのだが、自分の車は大学へ置いてカー・プール(三、四人ずつの相乗り)で来ているので、そんなわけにもゆかない。やむを得ず一緒に行って少

さな場所から立ち去りたかった。その夫婦は以前テキサス州に住んでいて、親しい友人が引越すとき、最も良い品物をといて拳銃を二丁プレゼントしてくれたのだという。それ以来、拳銃がやみつきになったといつて、その日も数丁の拳銃を車に積んでいた。カリフォルニアでは登録が必要で、実弾をつめた

ままの状態を持ち運ぶことも禁止されているけれど、テキサスでは銃の売買や所持に何らの規制もないという。ここまで書いてきて今TVをつけてみたら、ちょうどそのテキサス州で州政府が導入しようとしている銃の登録制に反対する論議が沸いている場面を映し出しているではないか。全米五〇州のうち登録制になっているのは二十一州だと解説されていたが、父親が銃の犠牲になったという一人の主婦が紹介されて、彼女が「私はホーム・オーナーとして絶対に我が家を銃で守るわ」と断言すると、周囲の人たちから強い支持の拍手が起こっていた。

東バトンルーシュ郡裁判所で開かれている服部剛丈君射殺事件の公判四日目の二十日、検察、弁護側の冒頭陳述があり、「正当防衛」をめぐる対立した。

(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授)松本市出身)

リレーコラム